

1 趣旨

グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」（以下「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」という。）は、「世界青年の船」事業とグローバルリーダー育成事業の成果を継承し、グローバル化に対応できる青年リーダーを育成するという時代のニーズに即して、実施したものである。

シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズの目的は、「国際社会の各分野でリーダーシップを発揮し、社会に貢献する青年を育成する」ことであり、具体的には、①異文化対応力やコミュニケーション力を高める、②リーダーシップやマネジメント力の向上を図る、③国際協調の精神を育て、社会活動へ寄与する意識を高める、の三点を達成目標としている。

また、本事業は、日本と参加各国との友好親善を深めるとともに人材育成を通じての国際貢献を目指すものであり、外交上の役割も担っている。さらに、事業実施後の参加青年のネットワークの形成を図ることによって、事業目的が一層促進されることを期待するものである。

本事業では、具体的達成目標に到達するため、陸上研修及び船上研修においては、限られた研修期間で最大の成果が得られるよう研修の一貫性を図り、「青年の社会貢献」を共通テーマとしたコース・ディスカッション、リーダーシップの強化を目的としたリーダーシップ・セミナー、マネジメントの力の向上を目的としたプロジェクトマネジメント・セミナー、PY セミナー（参加青年が講師となって主催するセミナー）、寄港地活動、ナショナル・プレゼンテーション等各種活動を実施し、短時間で理論と実践による能力向上を図った。さらに、日本参加青年に関しては、コース・ディスカッションのテーマに応じて海外研修を実施した。加えて、本事業の一環として、参加青年の代表が、3月に東北で開催された第3回国連防災世界会議の関連事業に参加し、寄港地活動の成果と各国の防災の取組事例について発表を行った。

本事業の成果を測るため、全参加青年を対象に事業終了時にアンケート評価を行うとともに、事業実施前と実施後の比較調査を行った。アンケート評価の数値基準は、5段階評価（評価の高い方から5～1）を基本とし、比較調査については、別途、数値基準を設けた。

2 評価結果

事業目的の達成度

① 異文化対応力やコミュニケーション力を高める

異文化対応力やコミュニケーション力の向上の検証については、「事業への参加は異文化対応力の向上に役立つか」との質問に対し、4以上が86%となり、また、「事業への参加はコミュニケーション力の向上に役立つか」との質問に対し、4以上が78%となった。これは、前年度を上回る数値である（前年度、それぞれ84%及び66%）。

参加青年からは異文化対応力について、「異文化に対して偏見を持っていたが、事業参加を通して、

すべての文化はすばらしく、違いに関わらず、相互理解できることに気付いた。」や「互いを受け入れ、共通の土台を見付ける努力をする必要があることが分かった。」とのコメントがあった。また、コミュニケーション力については、「コミュニケーションをとることに積極的になった。」や「多様な人々の間で相互理解を達成するために、異文化コミュニケーションが重要であることを学んだ。」とのコメントがあった。陸上研修や船上研修でのディスカッションやレター・グループ活動、船上での共同生活等を通して、異文化対応力やコミュニケーション力を向上させることができたと言え、①の目標は達成できたと評価している。

② リーダーシップやマネジメント力の向上を図る

リーダーシップとマネジメント力の向上を目指し、参加青年の主体性を育てる活動（PY セミナーや委員会活動）、参加青年の自由な発想を育てる活動（自由時間に実施する自主活動）を実施するとともに、リーダーシップやマネジメントについての学びを深めるために、有識者によるセミナーを実施した。特に、日本参加青年については、事前研修の段階からリーダーシップとマネジメントに関するセミナーを実施し、それらの認識や能力の必要性について学ぶ機会を得た。

リーダーシップの向上の検証については、「事業への参加はリーダーシップの向上に役立つか」との質問に対し、4以上が 67%であった。また、「セミナーを通じて、リーダーシップのコンセプトや資質を理解することができたか」との質問に対しては、4以上が 78%となり、前年度の取組より高い評価を得た（前年度 66%）。さらに、参加青年からはリーダーシップについて、「新しいリーダー像やリーダーシップ・スタイルについて学習し、それらを実践することができた。」や「リーダーシップとは、自分の個性や特技など、これまでの人生の中で培ってきたものを発揮することであることが分かった。」とのコメントがあった。

マネジメント力の向上の検証については、「事業への参加はマネジメント力の向上に役立つか」との質問に対し、4以上が 62%となり、これは前年度を上回る数字である（前年度 56%）。また、「プロジェクトマネジメントのコンセプトを理解することができたか」との質問に対し、4以上が 60%となり、参加青年からは、「プロジェクトマネジメントに関する基本的な情報を入手できた。」や「プロジェクトを始める前に、しっかりと計画を立て、プロジェクト終了時の姿をはっきりと描くことの大切さを学んだ。」とのコメントがあった。このことから、参加青年は、社会の各分野で活躍するために必要なリーダーシップやマネジメント力の必要性の認識と基礎を身に付けることができたと言え、②の目標は概ね達成できたと評価している。

③ 国際協調の精神を育て、社会活動へ寄与する意識を高める

国際協調の精神を育てるため、目標達成を目指して多国籍の青年が協働する場として、コース・ディスカッションのほか、生活グループであるレター・グループ活動、委員会活動、自主活動を設定した。アンケート結果を検証すると、「本事業は他国の人々との友好関係を築くのに役立つか」と質問したところ、参加青年の 97%は「役立つ」又は「非常に役立つ」と回答し、前年度を上回る数値を示した（前年度 94%）。また、「本事業は他国の人々との相互理解に役立つか」と質問したところ、参加青年の 96%は「役立つ」又は「非常に役立つ」と回答し、前年度と同等の数値を示した。社会活動へ寄与する意識を高めるため、リーダーシップ・セミナー、プロジェクトマネジメント・セミナーや事後活動セッションを通じて目標の達成を目指した結果、参加青年の 92%は「何らかの社会貢献活動を始めたい。」「参

加したい。」との意欲を示し、「事業中に築いた国際的なネットワークをいかしながら、社会貢献活動に取り組んでいきたい。」「本事業を通して培ったリーダーシップなどの能力を学校、職場、地域でいかして社会貢献活動を実施したい。」とのコメントが多数あった。また、具体的な社会貢献活動について、「国内外でボランティア活動を始めたい。」「本事業を通じて学習・経験したことを児童生徒に伝えたい。」「国際交流や文化交流を始めたい。」「大船渡・陸前高田の復興支援をしたい。」「防災に取り組みたい。」とのコメントがあり、「青年の社会貢献」に対する意識や自覚を高めたものと評価できる。

以上のように、国際社会への貢献も含めて社会貢献活動への意欲が向上したことから、目的③は十分に達成できたと評価している。

事業の満足度・貢献度

事業全体について、前年度の5段階評価による総合評価では、4以上が80%台後半となったことから、今年度も同等レベルの評価を目指したところ、事業終了時のアンケート評価では、4以上が84%となったことから、ほぼ目標値を達成する結果となった。

アンケート調査によると、参加青年は「文化交流」や「自己啓発」を本事業に期待して参加したことがうかがえ、最も有意義な活動の上位2項目に挙げられた「ナショナル・プレゼンテーション」「コース・ディスカッション」について、「プログラムの内容に満足したか」と質問したところ、5段階評価で4以上がそれぞれ89%、65%となったことから、文化交流については前者が、自己啓発については後者が一定の役割を果たし、本事業は参加青年の期待に沿ったプログラムであったことが立証された。また、「事業からの最大の学びは何か」との質問に対し、参加青年からは、「異文化理解」「異文化対応力やコミュニケーション力」「リーダーシップやマネジメント力」「社会へ寄与する意識」との回答が多数あり、本事業の目指す目的と参加青年の学習成果が一致する結果となったことが、高い満足度につながったと言える。

また、参加青年の70%以上は、「主体性・積極性」「自信」「チャレンジ精神」を身に付ける上でも本事業は役立つと回答した。また、「事業参加を通じて、仕事の将来性を高められると思うか」と質問したところ、86%の参加青年は「そう思う」又は「非常にそう思う」と回答した。

さらに、参加青年に対して、本事業の人生や社会への関わりについて評価するため、「本事業を通じて、人生や社会に対する見方が変化したと思うか」と質問したところ、90%の参加青年は、「そう思う」又は「非常にそう思う」と回答した。アンケート評価によると、事業への参加により「チェンジ・メーカーとしての青年の社会的役割について認識を深めた。」「自分のためだけでなく、社会に役立てる人材になりたい。」との回答や、人生の目的を明確にしたり、将来の進路を決めたりする上で役立ったとの回答があったことから、本事業は、参加青年の人生に良い影響を与えるプログラムであったと評価している。

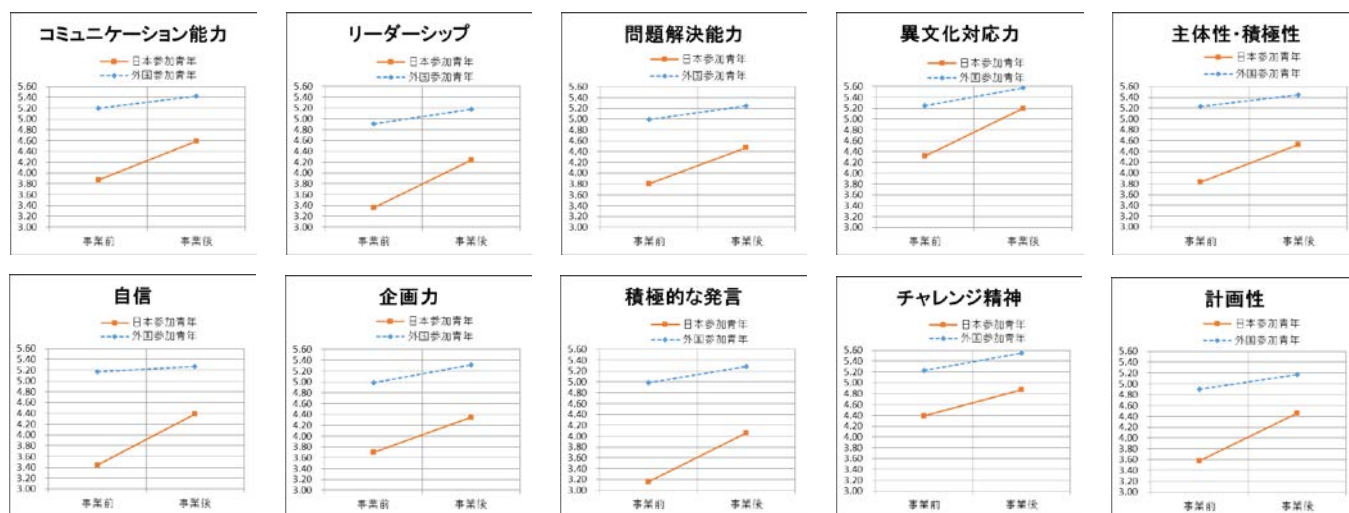
参加青年の成長

事業実施前と実施後で以下に示す10項目の能力について、6段階(6=十分備えている、5=備えている、4=ある程度備えている、3=あまり備えていない、2=備えていない、1=全く備えていない)による比較調査を行ったところ、特に高い伸び幅を示したのが、「異文化対応力」「リーダーシップ」「積極的な発言」「計画性」であり、それぞれ4.8から5.4、4.1から4.7、4.0から4.6、4.2から4.8となり、0.6ポイントの増となった。この結果から、参加青年はグローバルリーダーとしての基本的な能力や態度を身に付けることができたと評価できる。

この比較調査においては、日本参加青年と外国参加青年との間で、各項目の平均値や伸び幅に顕著な違

いがみられた。10 項目の能力の平均値のうち、陸上研修前に 4.0 を上回ったのは、日本参加青年では、「異文化対応力」(4.3) と「チャレンジ精神」(4.4) のみであったが、外国参加青年では、「リーダーシップ」及び「計画性」(4.9) 以外の項目で 5.0 を上回った。一方、10 項目の能力の伸び幅について、船上研修後、日本参加青年では、「自信」「積極的な発言」「リーダーシップ」「異文化対応力」「計画性」が 0.9 ポイントの増となったが、外国青年では、陸上研修前の平均値が高かったこともあり、伸び幅は 0.1 から 0.3 ポイントの間に留まった。

事業実施前後の 10 項目の能力の伸び幅の比較



一方、日本参加青年については事前研修から陸上研修までの準備期間に、ほぼすべての項目でポイントが下がる傾向がみられた。その理由としては、日本青年が自分と他人を比べすぎてしまうこと、英語力及び発言力の弱さから自信を失ってしまうことが考えられる。このことから、参加青年の能力の継続向上のためには、研修中及び研修後の適切なフォローが必要であると言える。

さらに、以下に示す 5 項目（自己認識、意欲、社会形成・社会参加、自らの将来に対するイメージ、自国に対する認識）について、4 段階評価（4=そう思う、3=どちらかと言えばそう思う、2=どちらかと言えばそう思わない、1=そう思わない）に基づき、本事業に参加した日本青年(A)と参加していない日本青年(B)との比較調査を行ったところ、事業実施前は、「自己認識」については A が B を下回ったが、その他の項目については、A が B を大きく上回る結果となった。このことから、本事業には「意欲」「社会形成・社会参加への意識」「自らの将来に対するイメージ」「自国に対する認識」が高い青年が参加したことがうかがえる。事業参加後は、すべての項目について、A が B を著しく上回り、事業参加を通じた参加青年の成長が立証できる結果となった。

以上のことから、伸び幅は異なるものの、全体的にポイントが増となったことから、本事業は、参加青年の人材育成に大きく貢献していると言える。他方で、一部参加青年に対して実施した「異文化感受性発達調査」の数値は、事業実施前後で大きな変化が見られなかったことから、異文化との違いを認識しつつも、それを受け入れ、なじむまでは至らなかった参加青年が少なくなかったものと推察される。

交流相手国による評価

本事業は、外国青年の人材育成にも寄与しており、参加各国の NL のほか、参加国政府、参加国在外公

館から高い評価を受けている。具体的には、何にもまして一部の訪問国における表敬ランクの高さに表れるとともに、関係者の発言に表現されている。日本青年の航空機による「海外研修」の取組において、各国とも青少年担当大臣レベルの表敬が行われたことは言うまでもないが、トルコ共和国及びニュージーランドにおいて、首相表敬が組み入れられ、多くの時間を取って熱心にお話いただいた。また、NLからは、「日本国政府の世界の青年たちへのたゆまぬ力添えと、人材育成に対する献身と情熱に心から感謝する。」や「日本政府が若者に投資し、異文化理解と対話の場と機会を提供していることに、敬意を表したい。」とのコメントがあった。また、訪問国からは、「シップ・フォー・ワールド・ユースを実施される日本国政府に心から感謝する。平和の構築や敬愛の精神を形成する上で、世界各国の青年が集うこの事業は大変有意義である。」との高い評価や、参加国在外公館からは、「この事業は、今般課題となっている国際平和と共存を実現するための世界的なネットワークを構築する機会を提供するものである。」とのコメントがあった。

以上のように、本事業は、人材育成面での国際貢献を行っており、交流相手国から高く評価されていることから、国際親善上及び外交上重要な役割を果たしていると認識している。

外国参加青年の親日感情の向上

外国参加青年の親日感情の評価を検証するため、「この事業は、あなたと日本の人々との相互理解に役立つか」と質問したところ、97%の外国参加青年は「役立つ」又は「非常に役立つ」と回答した。

また、「あなたの日本に対する印象は、この事業に参加したことでどのように変わったか」と質問したところ、93%の外国参加青年は「良くなった」又は「非常に良くなった」と回答しているが、これは、前年度の82%を大きく上回っている。

事業からの最大の学びについて、外国参加青年からは、「日本文化への理解」との回答が多数あり、例えば、「時間厳守」「規律」「価値観の尊重」「制度」などが挙げられた。また、「日本に留学したい。」「日本で働きたい。」「自国の日本国大使館で働きたい。」とのコメントもあったことから、日本への理解や関心が深まったと評価できる。

さらに、外国参加青年は、地方プログラムの際にホームステイを行っており、「ホームステイの体験には満足したか」と質問したところ、4以上が96%となるなど非常に高く、その理由としては、「ホストファミリーとの交流を通して、一般家庭の日常生活や日本の文化や習慣を体験し、多くを学んだため。」との回答が多数あった。ホームステイは日本についての理解を深める上で意義深い経験となり、親日感情の向上に大きく貢献していると評価している。

国連防災世界会議関連事業への参加

日本国内寄港地活動として、東日本大震災の被災地である大船渡、陸前高田を訪問するとともに、仙台で開催される「国連防災世界会議」とのつながりを組み入れたことにより、被災からの復興に加えて、「被災状況の伝承」と「防災意識の啓発」を意識したプログラム内容になった。具体的には、第3回国連防災世界会議開催の機会を捉え、事業の成果を対外的に発表するとともに、被災地訪問を終えた青年から見た教訓、世界の防災に関する取組等について広く内外に発信するため、事業終了後、参加青年の代表を再び招へいし、国連防災世界会議関連事業において、「ワールド・ユース・フォーラム～世界の青年と考えよう、身近な防災」を開催するとともに、その他の関連事業に参加した。

アンケート結果を検証すると、「本フォーラムは学びのあるものだったか」と質問したところ、来場者

の76%は、「大変学びがあった」「学びがあった」と回答し、「本フォーラムを通して、身近な防災への取り組みの理解は深まったか」と質問したところ、来場者の59%は「大変深まった」「深まった」と回答した。さらに、「様々な国々の状況、防災への仕組み、取組を知り、防災への意識が高まった。」や「災害に備えるための人作りの原動力として、若者が重要であることが再認識できた。」とのコメントがあり、来場者から高い評価を受けることができたと言える。

また、参加青年に対し、「関連事業への参加を通して、身近な防災への理解は深まったか」と質問したところ、全参加青年は、「大変深まった」「深まった」と回答し、「防災のために青年が果たすべき社会的役割と青年ができることについて認識を深めることができたか」と質問したところ、全参加青年は「大変良くできた」又は「できた」と回答した。帰国後の活動について、「防災に対する周囲の関心を高めたい。」

「地域で防災リーダーになりたい。」「防災教育に取り組みたい。」「伝承の重要性について伝えたい。」とのコメントが多数あったことから、目的を十分に達成できたと評価している。

3

結論

評価結果のとおり、参加青年は本事業の三つの目的を概ね達成し、事業全体について、総合評価が高かったことから満足のいく事業であったと評価している。さらに本事業は、海外から高い評価を受けており、国際親善上及び外交上重要な役割を果たしていると考えている。ただし、事業日数が以前の事業よりも短くなったことにより、特にリーダーシップやマネジメント力については、時間的な制約により実践的な体験が十分にできなかったことで、高い評価とならなかったことから、課題が残る結果となった。

日本参加青年については、全体的に能力が向上する結果となったが、個別的な面では、英語力及び発言力の弱さがあり、コミュニケーション力の伸び幅は小さい結果となったことから、日本参加青年の英語力及び発言力の更なる向上が必要と言える。また、船上研修期間が短かったことにより、能力の伸び幅は過去の事業に比して小さい傾向となった。

以上を踏まえると、より長期の船上研修期間とすることで、実践的な体験や活動が十分に行えることから、事業成果を上げることにつながると認識している。また、日本参加青年だけでなく、全参加青年の能力の更なる向上が期待できることから、船上研修期間の延長が本事業の評価を格段に向上させるものと考えている。